

名古屋芸術大学と豊橋市自然史博物館による 5年間の連携事業について

*About 5years Collaborative Project by Nagoya University of the Arts
and Toyohashi Museum of Natural History*

東條 文治 *Bunji Tojo*

(人間発達学部)

安井 謙介 *Kensuke Yasui*

(豊橋市自然史博物館)

加藤 真浩 *Masahiro Kato*

(彫刻家 (名古屋芸術大学卒業生))

1. はじめに

平成26年12月に名古屋芸術大学と豊橋市自然史博物館との間で連携協定が締結されて以降、様々な連携事業が展開されてきた。今後更に連携事業が発展するための一助とすべく、本稿ではこれまで5年間の連携事業について簡単に記録する。

連携協定締結以前から、筆者の一人東條は、名古屋芸術大学人間発達学部の小学校教員養成課程の学生を対象とした学外授業を、同じく筆者の一人である安井の協力を得て豊橋市自然史博物館において展開してきた。博物館・学芸員の活動に関する講義、標本の作製過程や収蔵状況の見学、博物館で実施している小学校へのアウトリーチ活動の事例などの学習を通して、博物館の活用を実践できる小学校教員の養成に取り組むとともに、博物館を利用した大学生の教育及び大学生を活用した博物館活動の充実という大学と博物館間の相互連携の可能性を模索してきた。このような豊橋市自然史博物館での授業実績から、教育を担う人材を輩出することを目的とした人間発達学部のみならず、名古屋芸術大学の学生の学習・活動の場として下記の2点の観点から博物館を活用できないかという構想が誕生した。

①学生の実践の場として博物館を利用することで、大学と博物館にとって相互に利益のある人的交流を行う。

②芸術系大学の学生のセンスや発想を基に、博物館スタッフと協力し、これまでになかった博物館の魅力の創造と発信を行っていく。

これらの構想を実現するためのプロジェクトが、名古屋芸術大学の菅嶋康浩教授(当時)、茶谷薫教授、早川知江准教授と本稿著者の一人である東條によって平成26年度にスタートし、このプロジェクトがきっかけとなり連携協定が締結された。

連携協定締結から5年目を迎えた今年度も多くの連携事業が実施されると同時に、それらがマスコミに大きく取り上げられるなど(表1)、今後さらに両者にとって価値ある活

表1 連携事業に関する新聞報道(確認分)

	開催日	取り上げられた連携事業	掲載紙
平成26年度	12/12	連携協定締結	中日新聞(県内版)、東愛知新聞、東日新聞
	12/21~24	クリスマス・コンサート	中日新聞(三河版)、東愛知新聞
	2/11	ドン・ルイス コンサート	東日新聞
平成28年度	8/12~14	恐竜クレイオブジェ公開制作 (トゥリアサウルス)	中日新聞(三河版)、東日新聞
平成29年度	7/19~8/31	特別企画展PRオブジェ (コーカサスオオカブト)	東日新聞
平成30年度	5/2	開館30周年記念式典演奏	東愛知新聞、東日新聞
	7/6~8/29	特別企画展PRオブジェ (ティラノサウルス)	中日新聞(三河版)、東愛知新聞、東日新聞
	7/21	ミュージアム・コンサート	東愛知新聞
	7/24	連携協定の実績に関する報道	東日新聞

動を深めていく期待が高まっている。

以下、平成26年度以降の5年間の連携事業について、事業を行った音楽領域分野、美術デザイン領域分野、子ども発達学科分野に分けて、概要を記す。

2. 音楽領域分野

音楽領域分野の連携事業で、中心となっているのは常設展示室内(自然史スクエア)でのコンサート活動である(表2、図1)。連携事業が開始した平成26年度は学生ボランティアにより演奏が行われたが、平成27年度以降は様々な場で広く演奏活動を行っている在校生・卒業生により行われている。

また、平成27年2月11日には、当時本学の事務職員であった加藤多美子氏の仲介で、電子オルガン奏者の第一人者であるアメリカ人ミュージシャンのドン・ルイス氏によるコンサートを特別企画展示室にて開催した。ドン・ルイス氏のコンサートに合わせて、本学音楽領域の鷹野雅史教授監修の下、電子オルガンコースの学生によるコンサートを自然史スクエアで開催した。

コンサート以外の音楽領域分野の連携事業としては、平成28年度に行った音楽学部演奏学科電子オルガン選択コース(当時)の望月茜氏による自然史博物館オリジナル曲「Dinosaurs live in Nature」の作曲がある。この曲は、平成28年5月2日の新生代展示室改装記念式典で披露されるとともに、それ以降博物館で開催される式典やイベント等で使用されている。なお、大学生が博物館オリジナル曲を作曲した事例は、恐らく全国初と思われる。

表2 連携事業（音楽領域分野）

	開催日	内容	参加者数
平成26年度	12/21	クリスマス・コンサート フルート4名	231名
	12/23	クリスマス・コンサート キーボード・ギター等3名	102名
	12/24	クリスマス・コンサート キーボード・ギター等3名	74名
	1/4	ニューイヤー・コンサート フルート4名	358名
	2/11	電子オルガン・コンサート 電子オルガン11名	278名
	2/11	ドン・ルイス コンサート	216名
平成27年度	8/14	サマーナイトガーデン・コンサート ピアノ+木管4名	410名
	12/23	クリスマス・コンサート 歌+ピアノ等3名	126名
	1/9	ニューイヤー・コンサート ギター+金管等7名	249名
平成28年度	5/2	オリジナル曲披露（新生代展示室改装記念式典にて）	
	5/2	ミュージアム・コンサート 金管5名	280名
	7/15～ 10/10	・特別企画展PR画像でのオリジナル曲使用	
	3/26	ミュージアム・コンサート ピアノ・バイオリン・パーカッション3名	229名
平成29年度	2/18	ミュージアム・コンサート アルトサクソフ・ソプラノサクソフ・パーカッション・ピアノ4名	300名
平成30年度	5/2	ミュージアム・コンサート ピアノ+電子オルガン・トーンチャイム等6名	157名
	5/2	ミュージアム・コンサート ピアノ+電子オルガン・トーンチャイム等6名	157名
	7/21	ミュージアム・コンサート ボーカル・ギター・ベース等6名	171名



図1 平成30年2月18日開催のミュージアムコンサートの様子

3. 美術・デザイン領域分野

美術・デザイン領域分野においてもさまざまな連携事業を展開してきた（表3）。最初の連携事業は、豊橋市自然史博物館が位置する豊橋総合動植物公園を題材としたオリジナルカルタの作成である。平成26年度に学生ボランティアを募集し、同園内の植物園を題材としたカルタの作成を開始した。学生がカルタの題材となる植物を選定するとともに、分担して絵札及び読み札の作成を行った。カルタ作成にあたっては豊橋市自然史博物館の松岡敬二館長及び本学美術領域の荒木紀江准教授が監修を行った。平成27年にカルタが完成し、同年12月18、21～23日に名古屋芸術大学のA&Dセンターにおいて、完成したカルタの原画展を行った。

平成27・29・30年度には、豊橋市自然史博物館で毎年夏休み期間中に開催される特別企画展をPRするオブジェの制作・展示を行った。オブジェは繋ぎ合わせた発泡スチロールを削り出したものに着色を施したもので、幅3m×奥行2m×高さ2.4m程度の大きさである。これを豊橋駅東西連絡通路に特別企画展開催期間に合わせて展示した。

平成27年度は特別企画展「天空を制した巨大翼竜と鳥たち」の開催に合わせて、翼竜ケツァルコアトルス（作者：加藤真浩、協力者：瀬瀬雄士（デザイン学部卒業生）、全長4m、高さ3m）を、平成29年度は同「武器甲虫ークワガタ、カブトムシの進化を探る一」の開催に合わせてコーカサスオオカブト（作者：加藤真浩、協力者：柴田康平（人間発達学部卒業生）、塚本将慈（美術学部彫刻3年、当時）、全長2m、高さ3m）を、平成30年度は同「体感！恐竜ワールド」の開催に合わせて、ティラノサウルス（作者：加藤真浩、協力者：塚本将慈、全長3m、高さ2m）のオブジェをそれぞれ制作・展示した（図2）。加えて、平成27年度は実物大のエドモントサウルス半身オブジェを制作し、夏季に開催される博物館の夜間開館時に、博物館玄関横に設置した（作者：加藤真浩、幅1.5m、高さ2m、発泡スチロール製）。

平成28年度は特別企画展「メガ恐竜展 in 豊橋」の開催に合わせ、8月12～14日に自然史博物館イントロホールにて、恐竜（トゥリアサウルス）をモチーフとしたクレイオブジェの公開制作を行った（作者：加藤真浩、協力者：久野孔仁子（美術学部彫刻大学院1年、当時）、木下千穂（美術学部彫刻3年、当時）、鈴木健士朗（美術学部彫刻2年、当時）、全長2.3m、高さ2.3m、水粘土にて制作）。

なお、PRオブジェ及びクレイオブジェは、豊橋市自然史博物館の学芸員がモチーフを提供し、本学の美術領域の萩原清作教授が監修を行った。

豊橋駅東西連絡通路に設置したオブジェは、例えばティラノサウルスであれば、子供の目線の高さに大きく開いた口があるようにと、どのオブジェも子供の楽しめるような造形になっている。設置場所が豊橋駅中央改札口前のため多くの市民の目に触れるとともに、中には記念写真を撮影している市民も多かった。クレイオブジェの公開制作は、イントロホールにて行った。来館者の多くが足を止め粘土を使った制作に興味を持って眺めてい

表3 連携事業（美術・デザイン領域分野）

	開催日	内容	設置場所
平成26年度		・植物園カルタ原稿作成開始	
平成27年度	7/9～8/30	特別企画展 PR オブジェ（翼竜）	豊橋駅東西連絡通路
	8/10～8/16	ナイトガーデン PR オブジェ（恐竜）	自然史博物館玄関
		・植物園カルタ原稿完成	
	12/18	植物園カルタ展示・連携事業紹介	名古屋芸術大学 A&D センター
平成28年度	8/12～14	クレイオブジェ公開制作（恐竜）	自然史博物館イントロホール
平成29年度	7/19～8/31	特別企画展 PR オブジェ（昆虫）	豊橋駅東西連絡通路
平成30年度	7/6～8/29	特別企画展 PR オブジェ（恐竜）	豊橋駅東西連絡通路
	7/13～9/2	特別企画展示室内壁面デザイン作成	豊橋駅東西連絡通路



図2 平成30年度の特別企画展「体感！恐竜ワールド」のPRオブジェ、ティラノサウルス（作者：加藤真浩、協力者：塚本将慈、全長3m、高さ2m、発泡スチロール製）。豊橋駅東西連絡通路に設置

た。来館者の方々と実際に話をしながら、感想を聞くことができるためとても良い制作だった。

また、平成30年度は、特別企画展「体感！恐竜ワールド」の会場内に設置した恐竜動刻模型背後の壁面パネル4面のデザインをデザイン領域メディアコミュニケーションデザインコースの学生が作成した（坂部礼奈、佐藤功基、内藤四季、林春花、溝口奈緒）。監修は本学のデザイン領域の櫃田珠美教授が行った。

4. 子ども発達学科分野

連携協定締結以前の平成23年度から平成27年度にかけて、子ども発達関係学部の小学校教員養成に関する科目である「理科指導法」と「理科」において、小学校の生活科及び理科の授業での博物館の活用について学習する学外授業を豊橋市自然史博物館にて展開している（表4、図3）。

また、平成27・28年度には、全学の学生を対象とした科目である「教養講座（自然）」内で、自然科学に関する集中講義を豊橋市自然史博物館において開催した。この講義においては博物館内見学や所蔵標本を用いたワークショップのみならず、同館に併設する動植物園内での自然観察やその結果をもとにしたオリジナル動植物図鑑の作成も行った。

平成29・30年度は、筆者の一人安井が名古屋芸術大学に赴き、「理科指導法」の中で、

表4 連携事業（子ども発達学科分野）

	開催日	内容	参加者数
平成26年度	6/21	授業「理科指導法」（見学・実習）	45名
	8/11	ナイトガーデン見学	23名
	1/17	授業「理科」（見学・実習）	17名
平成27年度	7/12	授業「理科指導法」（見学・実習）	25名
	1/17	授業「理科」（見学・実習）	57名
	8/19～21	授業「教養講座（自然）」（見学・実習）	
平成28年度	8/17, 25, 26	授業「教養講座（自然）」（見学・実習）	11名
平成29年度	7/25	授業「理科指導法」（名芸大にて講義・実習）	40名
平成30年度	7/24	授業「理科指導法」（名芸大にて講義・実習）	50名



図3 「理科指導法」の学外授業で、豊橋市自然史博物館にてレクチャーを受ける学生の様子

生活科・理科の授業での博物館の活用に関する話題提供を行っている。

5. 考察

過去5年間、本学の学生や教職員、豊橋市自然史博物館職員をはじめとする多くの方の協力により、様々な連携事業を展開することができた。

ミュージアムコンサートに関しては、それらの参加者数や報道回数などをみても、安定した成果を上げていると考えられる。ミュージアムコンサートが博物館来館者数並びに来館者の満足度向上に資するのみならず、コンサート開始時の様な学生ボランティアによるコンサートを適時開催するなど、幅広く本学学生の実践教育の場として活用することも今後は検討していく必要があると思われる。

特別企画展 PR オブジェに関して、SNS 等により誰もが情報発信可能な現代において、豊橋駅東西連絡通路の様な不特定多数の人が接する場所へのインパクトのあるオブジェの設置は、学生の成果を効果的に社会へ発信する絶好の機会と言える。今後はオブジェだけでなく、「インスタ映え」する展示物を設置することで、特別企画展の PR 効果だけでなく博学連携事業へ市民の目を向けさせる効果が期待できる。

本学の授業に博物館での活動を取り入れることも、博物館の役割を深く理解し、教育分野で博物館の活用を促す効果があるだろう。例えば、学芸員が提示する展示コンテンツをどう展示することで来館者への教育効果を高めるか、本学の学生がグループで考え、工夫し、実際に展示を作製するというものなどが考えられる。

今後は、本学の芸術学部の新設された芸術教養コースの学生にとって魅力的な連携事業についても、芸術教養系の教員の協力の下、検討していく必要があると思われる。

事業内容の発案や企画、そして実施学生の募集など、連携事業の推進には各分野の教員、広報系職員、そして何より学生の協力を得ずして進めることはできない。連携事業により多くの教員や学生が興味を示すような一手を、絶えず準備しておく必要があるだろう。また、連携事業推進に掛かる費用確保のため、外部資金の獲得を積極的に行っていかなければならない。

謝辞

この5年間の連携事業については、本学の学生、卒業生、教職員、豊橋市自然史博物館職員など、多くの方の協力があって成り立ってきた物である。これらすべての方々へ深く感謝する。

参考文献

東條文治・安井謙介 2013 小学校理科で博物館の活用を实践できる教員の養成を目指して. 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 第2巻, 1-6.

大野照文・東條文治 2014 京都大学総合博物館のアウトリーチ活動「子ども博物館」について. 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 第3巻, 1-6.

- 松岡敬二・東條文治 2015 名古屋芸術大学と豊橋市自然史博物館との連携への取り組みについて. 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 第4巻, 1-15.
- 東條文治・安井謙介・黒田耕平 2015 骨格標本を使った学習活動—哺乳類の歯をテーマとして—. 名古屋芸術大学人間発達研究所年報, 第4巻, 61-69.